

## ずいそう



## 海, 想い

近藤 敏夫

約25年前にシンガポールに勤務しました。当時会社が大型工事を受注し、多くのスタッフが派遣され、若年の私もその一員として初めての海外勤務を経験しました。若い私は業務は日本から送られてくる資機材の通関業務から工具店や修理工場探しなど、一番若く、比較的英語も覚えていたので先輩からしごき上げられながら、慣れない仕事に一生懸命、たのしく過ごしました。

厳しいネゴを仲介していたとき、先輩から「お前は石橋を叩いても渡らないタイプだと言え」と言われたことは忘れられません。当時スタッフの殆どは語学力の不足を実感し、多くが英会話の学校に通うことになりました。丁度、読書好きな上司から、海洋冒険小説のホーンブローア・シリーズを紹介され、すぐにのめり込みました。この本はナポレオン時代の、主として英仏の帆船時代の海洋冒険小説で作者がセシル・スコット・フォレスターという人です。内容は主人公ホーンブローアの英国海軍での生き様、士官候補生から最後は提督になるまでの英国海軍での波瀾万丈の人生を周りの人々との関わりを含め、生き生きと描いたものです。

帆船の戦闘シーンをクライマックスとし、海上あるいは陸上での様々な出来事を通しての当時の海軍、海の男たちの生き様が生々しく描いてあり、主人公、その仲間達の「生きて、愛して、戦った」人生を感じては、鳥肌が立ち、クライマックスの戦闘シーンでは彼らの狂気に男の血が沸き立ちます。

ある時、英会話の授業中に教師から各自、Dreamを述べてみなさいということになり、思いっきり「アラスカでキングサーモンを釣りたい。食事は中華料理、四川、広東、北京、福建の4名の専門のクックで毎日違う料理を食べて、可愛いクーニャンを2名、昼はフィッシング、夜はホーンブローア・シリーズを読みたい」と言って英国人の教師に大受けをしました。

この本はチャーチルも愛読していたそうで、英国でも随分人気があるようです。作者のフォレスターは残念なことにシリーズ12巻で逝去しましたが、同じジャンルでアレグザンダ・ケントの「海の勇士/ボライソー・シリーズ」が始まり現在24巻目が出ています。残念ながら主

人公のボライソーは本巻で提督で戦死しますが、彼の甥がすでに艦長になっており、このシリーズはまだまだ続きそうで楽しみです。両シリーズとも英国海軍の戦記物で登場人物の魅力、迫力ある戦闘に毎回次巻の発刊を楽しみにしています。

なぜこれらの海洋ものに、そんなに魅かれるのかうまく言えませんが、揺れる船上の、ゆれる人間達の思いの交錯、これがひとたび戦闘になると弾が飛び、弾丸が飛び、チェンが飛びマストが折れ、地獄の中で、勝利を信じ不屈の精神で部下を率い、自ら敵船に切り込む主人公の魅力に夢中になります。この戦闘シーンこそ「血沸き、肉踊る」思いで、読むたびに自分が戦闘のまっただ中で剣を振り下ろしている気になり、新刊が出ると電車に乗るのが待ち遠しくなります。

で、帰国後また海、今度は海中ロボットに夢中になりました。重量約90tの本格的海中ロボットです。このロボットは世界でもおそらく最初の本格的海中ロボットで、水中で自動歩行して約20tの牽引力で捨石を平坦に均します。初めての全没型水中建設ロボットということでメーカーと一緒に熱い汗、冷たい汗を随分かくことになりました。このときは、すぐに潜水を習い、資格も取ってこの機械の導入に夢中になりました。

故障すれば自分で潜って点検し、水中でスパナも持ちました。当時の情熱は私に言わせると艦長ボライソーが自ら剣をかざし「総員、配置につけ！ 戦闘準備！」「撃て」「者ども、切り込め」…

まさに毎日敵艦に「切り込む」つもりで仕事を行った思いです。

現在、霧中を航海中の日本船団、建設業号、ボライソー艦長はどのように戦うのでしょうか。

潮の匂い、風の微妙な変化を素早く感じ、マスト上の見張り員に敵船団を早く見つけさせる。敵船団の動きを見極め邂逅、戦闘時の敵船団の動きをいろいろ予想し、自船団を展開。

デッキに砂を撒き、ハンモックネットィングを張り広げ、「総員、配置につけ！ 戦闘準備」「狙いつき次第、各個射撃！……撃てえ！」

……

……

われ本分を尽くせり！！！！